

コロナ禍後の対面科目における科目進行に伴う 着席位置の変更と試験得点率との関連性

中釜達朗*

The Relationship between the Seating Location Change of Students in Classroom as a Face-to-face Subject Progressed and Their Percentage Exam Score after the Corona Disaster

Tatsuro NAKAGAMA*

The author examined the relationship between students' seating location in classroom at the beginning of a face-to-face subject and their academic performance after the Corona disaster. As a result, a high positive correlation was obtained between their previous year's GPA and their average percentage score of the unit examinations. In this study, students in the seating locations that deviated from the correlation were tracked for changes in seating locations as the subject progressed. The results showed that more than half of the total students in the location at the beginning of the subject that scored higher than the correlation moved to other locations just before the end, while the students in them that scored lower than the correlation hardly changed their locations throughout the subject. If students' attitudes toward face-to-face subjects, their motivation for attending, or their social facilitation of learning could be investigated and correlated with their seating location and mobility, a more detailed analysis would be possible.

Keywords: Corona Disaster, Face-to-face Subject, Seating Location Change, Percentage Exam Score

1. はじめに

2022 年度に入り、大学の授業も一部を除いて対面授業が主流になった。文部科学省の調査¹⁾によれば、2022 年度前期において 7 割以上を対面授業とする予定とした大学等は 1,165 校中 1,116 校と全体の 95.8% にのぼる。しかしながら、約 2 年間、PC やスマートフォンを情報端末としてオンライン授業を受講していた学生にとって、対面授業に対する感覚はコロナ禍以前の学生とは異なっている可能性がある。鳥越ら²⁾は、これまでいくつかの大学で行われてきた学生の大学への意識調査を通じて、現在の

学生はやや受け身ではあるが、大学教育における学習面に期待している部分強いこと、コロナ禍の中で急遽、非対面型の授業が行われる中で、対面授業を強く希望する学生がいる一方で、非対面授業の良さを感じている学生もいることを指摘している。したがって、コロナ禍後の対面授業においては授業に対する期待感を持っている学生と持っていない学生が混在している可能性がある。

著者は COVID-19 感染拡大の第 6 波が収束した 2022 年度前期に対面授業として実施された 2 つの科目について、科目開始初期における履修生の着席位置と学業成績との相関について検討した³⁾。これらの科目は学科、学年および教室が異なるが、とも

*日本大学生産工学部応用分子化学科 教授

にスライドをスクリーンに投影して講義が実施されている。学業成績として受講前年度のGPAおよび当該科目での単元試験の平均得点率をそれぞれ指標とした。検討の結果、いずれの科目においてもスクリーンを正面としない窓側や中央では前方に着席していた学生ほどGPAは高く、コロナ禍以前にいくつか報告された着席傾向と同じだった。しかしながら、スクリーンを正面とする廊下側ではスライドの大きさに対して適度な視聴距離である後方に着席している学生ほどGPAが高かった。これは、オンライン授業において高成績を獲得した学生の何人かが対面授業においても「スライドの見やすさ」を重視していることを示唆している。一方、単元試験の平均得点率についてはGPAと正の相関が認められたが、その相関から外れた着席位置がいくつか認められた。

本論文では、相関から外れた要因が科目の進行に伴う着席位置の変更に関係すると推測した。科目初期においてこれらの位置に着席経験のある学生が科目の中期、終期にどの位置に着席したかを追跡した。相関より平均得点率の高かった位置と低かった位置に着席していた学生がどのような移動履歴を有していたかを分析したので報告する。

2. コロナ禍以前における着席位置の移動と学業成績との関連性についての報告例

コロナ禍以前において、学業成績と着席位置との関連性については数多くの報告がある。その中で、着席位置は科目を通じて固定されるという報告⁴⁾、⁵⁾が多く、授業ごとの着席位置の移動に言及している報告は少ない。

矢澤⁶⁾は、1年生の心理学の授業において、講義すべてにおいて無遅刻、無欠席の学生111名を対象に、着席位置と学習意欲あるいは学業成績との関係について検討している。教室を左側、右側、中央前方、中方および後方の5つのゾーンに分割したが、その中で、着席位置を固定している学生と移動している学生について言及している。報告では、ほぼ着席位置が固定している学生を固執型(31名)、変動していた学生を移動型(65名)とした。さらに移動型を移動方向と大きさによって左右移動群(30名)、前後移動群(19名)、大移動群(8名)および小移動群(8名)に分けた。分析の結果、固執型全体と移動型全体を比較したとき、アンケートにより解答させた学習意欲に関する設問の得点と該当科

目の試験の得点いずれも有意差は認められなかった。しかしながら、移動群間で比較した場合、大移動群が小移動群と左右移動群のいずれよりも学習意欲が高いことを示した。小移動群と左右移動群は自分の好みの座席に他の学生が座っていたのでその対処として席の移動が行われ、これが学習意欲の低下につながったと考察している。一方、大移動群の学生は学習意欲が高く、その時の教室内の状況において自分にとって最適な空間を見つけ出していたと推察している。この報告において対象教室には黒板はあるがスクリーンが設置しておらず、板書により授業が行われていたと考えられる。したがって、情報伝達源としてスクリーン使用を主とした授業に当てはまるかは定かではない。

中原⁷⁾は、自らの担当講義のデータを分析して講義を受ける学生側に必要な「成績の上がる受講方式」を提案している。分析の中で、着席位置の変更に伴う個人の成績変化にも言及している。具体的には、着席位置を後方から前方に変更した2名の学生について期末試験成績が前期と後期でどのように変化したのかを調査した。その結果、2名とも後方に着席していた前期に比べ、前方に着席位置を変更して受講した後期のほうが期末試験の結果が向上した。これは成績の良い学生と交流して自分の弱点が改善された結果であると考察している。しかしながら、著者自身も言及しているが調査人数が少なく、着席位置の移動と成績との関係については信頼性に欠ける点がある。

3. 分析方法

3.1 分析対象とした科目、授業回および授業方法

著者が以前行った分析³⁾において、対象とした科目は生産工学部応用分子化学科の分析化学Iと同学部の環境安全工学科で開講された環境分析学である。分析化学Iでは着席位置として教室内の座席を9ブロックに分割し、環境分析学では12ブロックに分割した。この分析では科目初期の着席状況を把握するため、最初に行われる単元試験直前の授業3回を科目初期として分析対象とした。具体的には授業回として分析化学Iでは第1～3回、環境分析学では第3～5回に該当する。このとき、科目初期にブロック内に着席した該当年次学生の延べ人数は両科目のどのブロックも10名以上であった。

本論文では科目初期において各ブロックに着席していた学生が授業の進行に伴って着席位置をどのよ

うに移動するかを追跡する。したがって、定量的な議論には延べ人数ではなく実人数が重要である。両科目において科目初期に各ブロックに着席した学生の実人数を調査したところ、分析化学 I では 9 ブロック中、すべてのブロックにおいて着席した学生の実人数が 10 名以上であった。一方、環境分析学については 12 ブロック中、7 つのブロックにおいて着席した学生は 10 名未満であった。したがって、本論文では分析化学 I を分析対象科目とした。

次に、授業の進行に伴う着席位置の移動を把握するため、科目中期と終期を追加して定義した。具体的には、分析化学 I において授業回として第 6～8 回を科目中期、第 11、13 および 14 回を科目終期とした。いずれも、単元試験直前の授業 3 回という原則に準拠している。第 12 回授業を対象回としなかったのは、当該回に単元試験が実施されていたからである。

分析化学 I は 2 年次の専門教育科目であり、2022 年度第 2 クォーター（6～7 月）に対面授業を原則として実施した。科目担当者は著者を含めた 2 名であった。本科目は 1 および 2 時限目に 2 クラス設置したが、直前に授業がなく、席取り競走が生じにくい 1 時限目を分析対象とした。15 回の授業のうち、第 1 回授業でガイダンスと講義、第 4、9 および 12 回授業で単元試験と講義、第 15 回授業で単元試験と振り返り、その他の回は講義と演習を実施した。着席する座席は試験を実施する授業回は指定し、実施しない授業回は自由とした。成績は演習点と単元試験により決定し、中間、期末試験は行わなかった。

講義と演習については新型コロナウイルス感染者や濃厚接触者、あるいは体調不良者に対して事前申請により Zoom での授業参加を認めた。講義では重要箇所を空白としたパワーポイントスライドのハンドアウトを資料として事前に配布した。配布は授業前に pdf ファイルを Google Classroom にアップロードすることにより行った。加えて、対面授業の出席者に対しては印刷物を授業開始時に直接配布した。授業は担当教員が Zoom を起動させた後、Zoom 参加者のためにパワーポイントのスライド画面を共有するとともに、教室のスクリーンにスライドを投影して行った。このとき、対面授業の出席者については Zoom の使用を認めず、スクリーンに投影されたスライドが見やすい位置に着席して受講するよう促した。講義は主にスライドの空白部分についてアニメーションを使って明示しながら内容を説明する方

法で進めた。演習では問題を対面参加者と Zoom 参加者に対して同時に示すため、問題をスライド画面で表示して専用用紙に解答させた。演習については得点そのまま成績に反映されるため、スライドが見えにくい位置に着席している受講生に対してノート PC やスマートフォンを使用して Zoom の共有画面から問題を閲覧することを許可した。Zoom 参加者は解答をスキャンアプリで撮影し、pdf ファイルとして Google Classroom に提出した。一方、対面参加者は解答した用紙を直接教員に提出した。なお、科目初期は第 1 回授業の科目ガイダンス（約 30 分）のみ著者が担当し、その他はもう一人の担当教員が講義した。中期はもう一人の担当教員、終期は著者がそれぞれ講義を行った。

3.2 使用教室および着席位置

使用した教室のレイアウトを図 1 に示す。

使用した教室は横 13.5m、縦 12.6m と横長である。新型コロナウイルス感染症対策のため、両教室とも 3 人掛け機の中央座席および最前列は着席不可とした。着席を許可した座席数は縦 10 列、横 9 列の 90 席である。スクリーンは廊下側の前面に設置されている。なお、補助的なサブモニターは教室内に設置されていない。スクリーンに投影した時のスライドサイズは横 2.03m、縦 1.52m（4：3、100 インチ）である。コロナウイルス感染時に感染者がどの座席に着席していたかを把握するために、受講者には授業回ごとに Google Form を用いて着席座席の位置を登録させた。本論文も既報³⁾と同様、科目受講履歴のない当該年次受講者を分析対象とした。

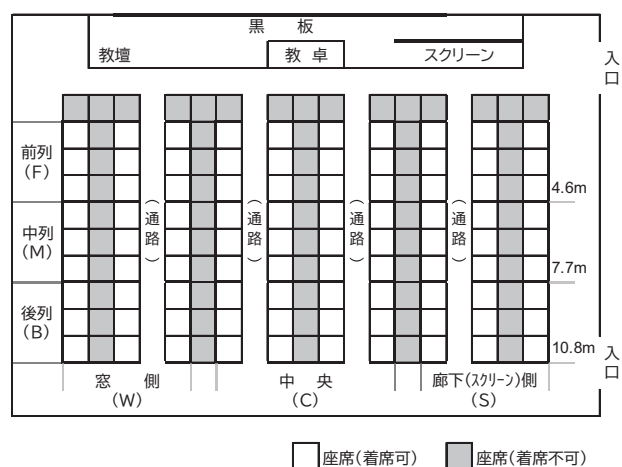


図 1 使用した教室のレイアウトとブロック分け
 (本論文においてブロックは縦列と前後列のアルファベットで示す。例えば、「WF」は窓側前列を意味する。図中右側に記載されている距離はスクリーン面に対して垂直方向のスクリーンからの距離。)

着席位置も既報³⁾と同様、教室内の座席を9ブロックに分割して設定した。すなわち、左右列はスクリーン正面の着席可能な縦3列を廊下側、窓に近い3列を窓側とし、残りの縦列を中央とした。一方、前後列については3列ごとに前列、中列、後列とした(図1)。

4. 結果および考察

4.1 GPAと単元試験の平均得点率との相関

既報³⁾では、受講前の学業成績として受講前年度のGPA、当該科目の学業成績として当該科目で実施した前単元試験の平均得点率を指標とした。GPAが高い学生は高い得点率が予想されるため、着席位置の教育的影響と分けて考える必要がある。本論文ではまず、GPAが高い(低い)のに得点率が低い(高い)着席位置を抽出するために、ブロックごとにこれら2つの指標間の相関を検討した(図2)。

その結果、5つのブロック(図2中、○)についてはGPA(x)と平均得点率(y)との間に高い正の相関が認められた($y=12.51x+31.77$, $R^2=0.9317$)。しかしながら、中央の後列(図中、CB)、廊下(スクリーン)側の前列および後列(同SFおよびSB)は相関より下に外れていた。これらのブロックに科目初期に着席した学生は、GPAから予想される得点率より低い得点率であったことがわかる。一方、廊下側の中列(同SM)は相関より上に外れていることから、GPAから予想される得点率より高い得点率の学生が着席していたことがわかった。本論文では、この要因が科目進行に伴う着席位置の変更に関係すると推測した。相関(図2)から外れた4つのブロックについて、科目進行に伴う各

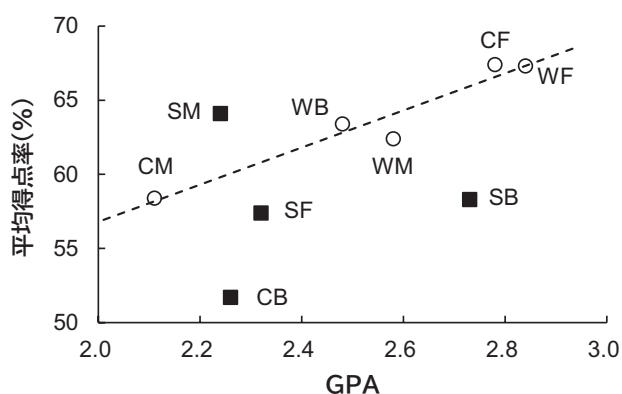


図2 受講前年度のGPAと当該科目で実施した単元試験の平均得点率との相関
(値は科目初期に各ブロックに着席していた当該年度生の平均値。W:窓側, C:中央, S:廊下(スクリーン)側, F:前列, M:中列, B:後列。)

ブロックの着席率および科目初期に該当ブロックに着席していた学生の着席位置の変化についてそれぞれ分析した。

4.2 各ブロックにおける科目進行に伴う着席率の変化

科目の進行に伴ってブロックの着席率が低下した場合は、着席していた学生が他のブロックに移動していることになる。図3に、全受講生の科目初期、中期および終期における各ブロックの着席率(着席した学生の総数に対する着席可能な総座席数の比)を示す。

科目初期における延べ受講者数は213名(男子176名,女子37名)であり、科目全体の着席率は78.9%であった。科目中期および終期の延べ受講者数は216名および201名、着席率は80.0%および74.4%であり、科目終期において着席率の低下が見られた。各ブロックの着席率に着目すると、窓側前列(図2中、WF)の着席率の低下が顕著であった。これは、スクリーンに投影されたスライドが見づかったために、学生が中央や廊下側の前列(同CF, SF)などに移動したためだと考えられる。相関から外れた4つのブロック(CB, SF, SMおよびSB)のうち、SFとSBは着席率が中期、後期でやや高くなり、CBとSMはやや低下していた。

図4に当該年度受講者について図3と同様の分析を行った結果を示す。

科目初期における当該年次受講者の延べ人数は195名(男子160名,女子35名)であった。1授業回あたりの平均受講者数は66名であり、教室全体としての着席率は72.2%であった³⁾。科目中期および終期の当該年次受講者の延べ人数は195名および183名、着席率は72.2%および67.8%であった。科目初期から終期における受講者全体の減少数(12

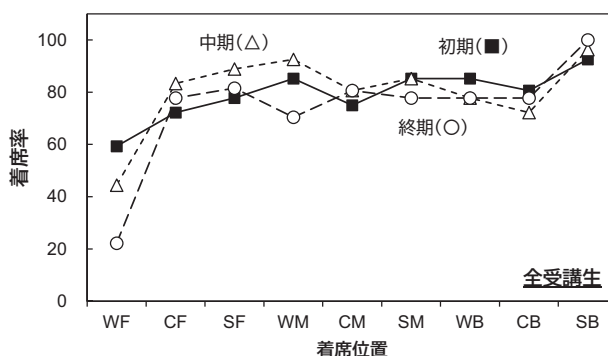


図3 科目初期、中期および終期における全受講生の各ブロックでの着席率
(W:窓側, C:中央, S:廊下(スクリーン)側, F:前列, M:中列, B:後列。)

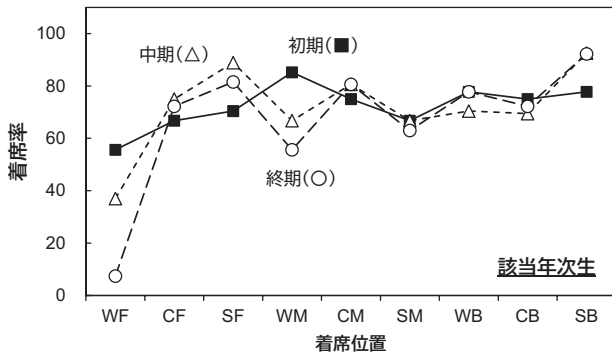


図4 科目初期、中期および終期における該当年次生の各ブロックでの着席率
(W:窓側, C:中央, S:廊下(スクリーン)側, F:前列, M:中列, B:後列。)

名, 1授業回あたり4名)は, 当該年次受講者の減少数に相当した。コロナ禍前の対面授業である2019年度の同時限同科目では, 科目前期における該当年次受講者の受講者数が1授業回あたり69名であった。このとき, 科目終期における受講者の減少数は1授業回あたり4名であった。したがって, コロナ禍前後において科目を通じた受講者数の変化に差がないと考えられる。図2の相関から外れた4つのブロック(SF, SM, CBおよびSB)については科目進行に伴う着席率の減少はほとんど見られなかった。逆に, 廊下側前列(SF)と後列(SB)については着席率の増加が認められ, 他のブロックから該当年次受講者が移動したことが推察された。

4.3 科目初期において相関から外れたブロックに着席していた学生の科目進行に伴う着席位置の変化

GPAと単元試験の平均得点率との相関(図2)から外れた4つのブロックについて, 科目初期に着席していた該当年次生の初期, 中期および終期における着席位置について解析した。それらの結果を以下に示す。

4.3.1 中央後列

科目初期において, このブロックに着席経験のある該当年次生総数は19名であった。これらの学生が科目初期, 中期および終期において各ブロックに着席した延べ回数を図5に示す。

まず, 期内における着席位置の定着率を比較するために, 同一学生が同じブロック内に着席した平均回数を算出した³⁾。ブロックの平均着席回数は, 期内の授業回において同一ブロックに着席した受講生の実人数に対する延べ着席回数の比として求めた。すべての学生が異なる場合には平均着席回数が「1」, 同じ学生の場合には「3」となる。中央後列

の場合, 同ブロックの延べ着席回数は27回(図5, CB)であったことから, ブロックの平均着席回数は1.4回となる。他のブロックでは, 中央および廊下(スクリーン)側の中列(同CMおよびSM), 窓側の後列(同WB)などに着席していた。したがって, 科目開始当初は中方から後方の着席を志向していたことがわかる。科目中期では同ブロックや中央の中列(同CM)への着席回数がやや減り, 窓側の後列(同WB)や中列(同WM)への着席回数が増加した。この結果から, 該当学生の何人かはこの時期に中央から窓側に移動したことが推察される。科目終期には廊下側の中列(同SM)への着席回数が減少したが, 他の着席位置の人数に大きな変動はなかった。移動は比較的少なく, 移動しても主に隣接するブロックへの移動に留まっていたと考えられる。科目初期において中央後列に着席した学生は人脈形成力が比較的高く³⁾, 友人と隣席している可能性が高いことが移動の少なかった原因の1つと考えられる。

4.3.2 廊下側前列

科目初期において, 廊下(スクリーン)側の前列に着席経験のある該当年次生総数は12名であった。これらの学生が科目初期, 中期および終期において各ブロックに着席した延べ回数を図6に示す。

該当学生は科目初期において同ブロック(図6, SF)に延べ19回着席していた。ブロックの平均着

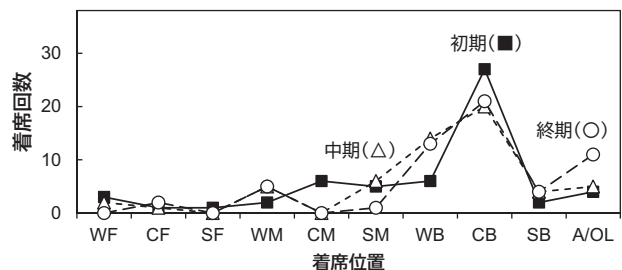


図5 科目初期において中央後列(CB)に着席していた学生の各期における着席位置と延べ着席回数
(W:窓側, C:中央, S:廊下(スクリーン)側, F:前列, M:中列, B:後列, A/OL:欠席またはオンライン受講。)

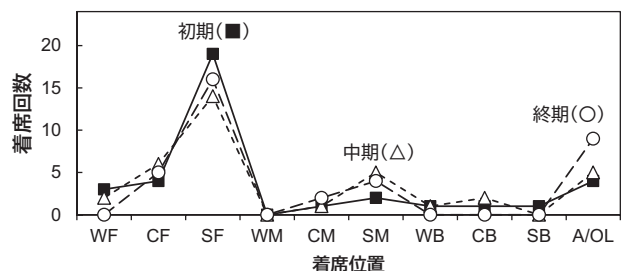


図6 科目初期において廊下側前列(SF)に着席していた学生の各期における着席位置と延べ着席回数
(W:窓側, C:中央, S:廊下(スクリーン)側, F:前列, M:中列, B:後列, A/OL:欠席またはオンライン受講。)

席回数は1.6回であり、中央後列とほぼ同じ回数であった。他のブロックでは窓側や中央の前列（同WF, SF）などにも着席しており、教室の前方への着席を志向していたことがわかる。中期では同ブロックへの着席回数が減少し、廊下側の中列（同SM）への着席回数が増加した。終期には窓側の前列（同WF）に着席する学生はいなくなり、同ブロックへの着席回数がやや増加したが、他のブロックの人数に大きな変動はなかった。科目初期に中央の後列に着席していた学生と同様、移動は比較的少なく、移動しても主に近くのブロックへの移動と考えられる。

また、科目初期において廊下側前列に着席していた学生はGPA、人脈形成力とも低い傾向だった³⁾。したがって、廊下側前列が比較的落ち着く環境であり、着席位置を変えるストレスを避けていた可能性もある。

4.3.3 廊下側中列

科目初期において、廊下（スクリーン）側の中列に着席経験のある該当年次生総数は12名であった。これらの学生が科目初期、中期および終期において各ブロックに着席した延べ回数を図7に示す。

該当学生は科目初期において同ブロック（図7, SM）に延べ18回着席していた。ブロックの平均着席回数は1.5回であり、中央後列と同じ回数であった。他のブロックでは中央の中列（同CM）、窓側、中央および廊下側の後列（同WB, CBおよびSB）などにも着席していた。したがって、これらの学生は中方から後方の着席を志向していたと考えられる。中期では同ブロックの着席回数が減少したが、窓側、中央および廊下側の後列の着席回数も減少した。一方、中央および廊下側の前列（同CFおよびSF）や窓側の中列（同WM）の着席回数は増加したため、中、後方から前方に移動したことが推察される。授業評価アンケートを確認したところ、担当した教員の講義において教室内にマイクは入らな

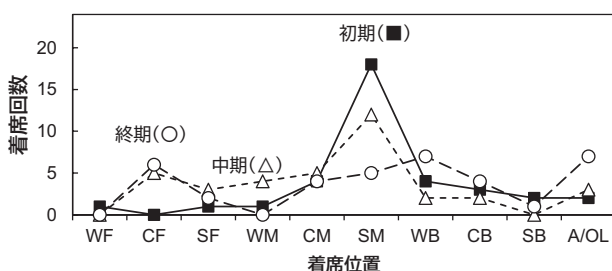


図7 科目初期において廊下側中列（SM）に着席していた学生の各期における着席位置と延べ着席回数（W：窓側，C：中央，S：廊下（スクリーン）側，F：前列，M：中列，B：後列，A/OL：欠席またはオンライン受講。）

かった授業が数回あったことがわかった。したがって、これらの学生は教員の肉声が聞き取りやすい前方へ移動したと考えられる。このトラブルは教室全体に影響しているはずであるが、今回検討した他の3ブロックでは廊下側中列のような着席位置の移動は認められなかった。終期になると同ブロックへの着席回数はさらに減少し、窓側の中列への着席回数も減少した。一方で、窓側や中央の後列（WB, CB）などの着席回数が増加し、着席志向が後方に移動したと推測される。終期では担当教員が著者に交代しており、スライドで使用しているフォントが4ポイントほど大きくなっている。教室内のマイクも機能していたことから、該当学生は教室後方でも講義内容が把握できると判断したと考えられる。以上の結果から、該当学生は授業の状況によって着席位置を大きく変更し、合理的かつ柔軟に対応していたことが推測される。

4.3.4 廊下側後列

科目初期において、廊下（スクリーン）側の後列に着席経験のある該当年次生総数は14名であった。これらの学生が科目初期、中期および終期において各ブロックに着席した延べ回数を図8に示す。

該当学生は科目初期において同ブロック（図8, SB）に延べ21回着席していた。ブロックの平均着席回数は1.5回であり、中央後列と同じ回数であった。他のブロックでは窓側および廊下側の中列（同WMおよびSM）、窓側や中央の後列（同WB, CB）にも着席しており、教室の中方から後方を志向していたと推測される。科目中期、終期では窓側の中列の着席回数が減少し、廊下側中列への着席回数が増加したが同ブロックへの着席回数は変わらなかった。したがって、同ブロックに着席した対象学生は科目を通じてほとんど同ブロック内に留まっていたと考えられる。

科目初期に廊下側後列に着席していた学生は中央

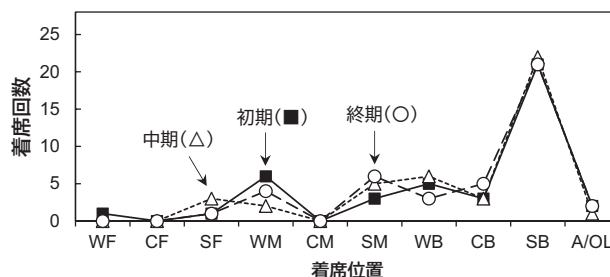


図8 科目初期に廊下側後列（SB）に着席していた学生の各期における着席位置と延べ着席回数（W：窓側，C：中央，S：廊下（スクリーン）側，F：前列，M：中列，B：後列，A/OL：欠席またはオンライン受講。）

後列に着席していた学生と同様、人脈形成力が比較的高かった³⁾。したがって、友人と隣席している可能性が高いと考えられる。一方、廊下側後列は前述した他3ブロックと比較して科目初期における欠席者またはオンライン受講回数(図8, A/OL)が極端に少なく、その状況が科目終期まで続いた。鳥越ら³⁾は、学生が対面授業の良さとして感じられる第一がコミュニケーションの取りやすさにあると報告している。したがって、廊下側後列には対面授業への出席意欲が高い友人グループが着席し、着席位置をほとんど移動せずにそのまま科目終期まで出席していたと推測される。

以上の結果から、GPAと単元試験の平均得点率との相関より得点率の高かった廊下側中列に着席していた当該年次生は、授業の状況により科目進行とともに着席位置を変えていたことが推察された。この結果は、既報^{5), 6)}の結果と矛盾しない。一方、相関より得点率の低かった中央後列、廊下側前列および後列に着席していた当該年次生は科目を通じて着席位置をほとんど変えていなかったことがわかった。

4.4 相関から外れたブロックにおける着席回数の変動係数比較

学生の着席位置の移動を簡単かつ定量的に議論するために、GPAと単元試験の平均得点率との相関から外れた4つのブロックについて、各期における各ブロックへの着席回数の変動係数(CV)を算出した。着席位置が偏った場合はCV値が高くなり、分散して平均化された場合には低くなる。図9にCV値の科目進行における変化を示す。

科目初期においてはどのブロックもほぼ同じCV値であった。しかしながら、科目中期においては廊下(スクリーン)側後列(図9, SB)を除く3つのブロックでCV値の低下が見られた。この変化

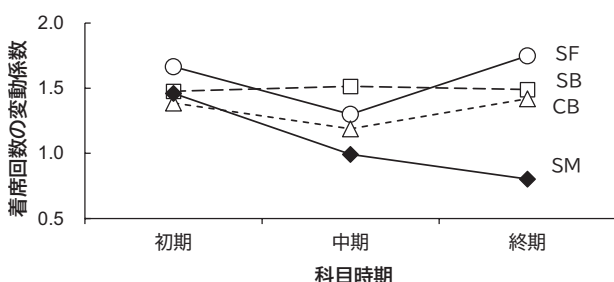


図9 各ブロックにおける科目の進行に伴う着席回数の変動係数変化
(CB:中央後列, SF:廊下(スクリーン)側前列, SM:廊下側中列, SB:廊下側後列。)

は、該当学生が他のブロックに分散したことを反映している。後期では廊下側前列および中央後列(同SFおよびCB)のCV値は初期の値に戻り、廊下側後列も中期の値と変化しなかった。一方、廊下側中列(同SM)のCV値は中期の値よりさらに低下し、該当学生がより分散したことを示した。これらの結果は各ブロックとも着席位置の変化(図5~8)を反映していた。この結果からもSMブロックの特徴的な着席位置の移動性を説明することが可能であった。

科目初期において廊下側中列に着席していた学生の着席位置の移動性については今後、検討する必要がある。図2で指標としたGPAは主にオンライン授業で獲得したポイントである。また、学習の際に他人の存在を好まない学生は他人が前後に着席している中列を志向しないと考えられる。したがって、科目初期に廊下側中列に着席していた学生は授業内容に対して関心を持ち、かつ1人で学習するよりも他人の存在により学習意欲が向上する学生(学習に対して社会的促進⁷⁾効果の大きい学生)である可能性がある。

5. まとめ

以上、GPAと単元試験の平均得点率との相関から外れた着席位置の学生について、科目の進行に伴う着席位置の移動性について報告した。検討の結果、科目初期に相関より得点率の高かったブロックに着席していた学生は中期、終期に着席位置を移動していた。一方、相関より得点率の低かった位置の学生はほとんど着席位置を移動していなかったことがわかった。この違いは授業に対する関心や授業内容を理解しようとする意識の違いなどによると推測される。

分析対象とした科目では科目初期においてほとんどのブロックで着席率が8割程度と差がなく、物理的に学生が単独で着席位置を移動できる余地があった。また、主な情報伝達媒体であるスクリーンが1か所だけ設置されていた状況での結果である。着席率が異なったり、サブスクリーンやモニターなどが設置されていたりする環境では異なる結果となったと考えられる。さらに、履修生の学修意欲や理解力などによっても結果が左右される可能性がある。今回の調査はコロナ禍後ということもあり、履修生相互の人間関係がそれほど構築されていない環境下での結果である。したがって、影響力の非常に強い履

修生やその集団の存在などによっても結果が変わってくると思う。

今後、学生の対面授業への意識や受講動機、あるいは学習に対する社会的促進性などを調査し、学生の着席位置や移動性と対応させることができれば、より詳細な分析が可能となると考える。

参考文献

- 1) 大学等における令和4年度前期の授業の実施方針等に関する調査及び学生の修学状況（中退・休学）等に関する調査の結果について，文部科学省，2022.
- 2) 鳥越ゆい子，小湊真衣，望月嵩博，青木直樹，現代学生のコロナ禍における非対面授業への意識—対面授業と非対面授業それぞれのよさ—，17，2021，pp.145-151.
- 3) 中釜達朗，コロナ禍後の対面講義における学生の着席位置と人脈形成力および学業成績との相関，工学教育，71(2)，2023，pp.21-26.
- 4) 吉田幸一，教室内の座席位置と成績の関係，札幌医科大学医療人育成センター紀要，9，2018，pp.1-3.
- 5) 下鶴幸宏，中野正博，座席による学生の勉学意欲の違いの調査研究，バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌，10(2)，2008，pp.149-158.
- 6) 矢澤久史，教室における座席位置と学習意欲，学業成績との関係，東海女子大学紀要，22，2002，pp.109-117.
- 7) 中原崇文，データが示す成績の上がる講義の受け方，愛知工業大学研究報告，45，2010，pp.169-172.
- 8) 末永俊郎，安藤清志，大島尚，社会的促進の研究，心理学評論，24(4)，1981，pp.423-457.

(R4.11.29 受理)